

AI。人工知能を利用したコミュニケーション型アプリケーションは、ここ十数年で目覚ましい発展を遂げてきた。

特にクラウドコンピューティングの発達、それに伴う携帯電話からスマートフォンへと、より直感的に操作しやすい大規模容量の携帯型端末が急速に普及したおかげで、一般人にとって垣根の高かったインターネットの利用もすっかり浸透しきった。

AIアプリはそうした携帯型端末で主に利用できるソフトウェアとして、日常生活に溶けこむ形で利用されるようになっていく。地図や交通機関の利用をはじめとしたナビゲーシオンや、通勤時間など短時間に遊べるソーシャルゲームらと合わせて世間に認知されていった。

それと並行に、看護サービスで四六時中間が補助する負担を軽減させるために開発された介護用AIアプリや、視力を失った人を補助するための盲導用AIアプリなど体の不自由な人をサポートするもの、料理のレシピをレクチャーしたり、家庭教師の代わりに受験勉強を教えることに特化した有料のAIアプリなども次々に生まれた。

こうしてAIアプリは近未来の現代社会に密接に関わるものとして、重要視されていく。そこから更に年月を経た今では、幼少の頃からAI型アプリの入った携帯型デバイスを与えられて、情操教育の一環として利用する都市区画もあるほどだ。それぐらいヒトとAIの関係性はコンピューターが世界に誕生してから長い年月を経て、培われてきている。

一方、ロボット技術に関しては工業用やドローンなど、昔のラジコンを進化させたような遠隔用の機械が発達している。しかしアンドロイド技術に関しては、自立した二足歩行のバランスを取る難しさや、物理法則を克服できない制約の多さから、産業開発はいまだ遅れていた。人間のクローンにAIを乗せて動かせばいい、というような非人道的な科学者の意見が通るはずもなく、ペット型の愛玩用ロボットも、昔から一部の嗜好家にしか需要がない。

なので今の時代でも、ヒト型アンドロイドは創作の世界で活躍するのみだ。古今東西、アニメや漫画でもアンドロイドと人間の恋愛を扱った作品は多い。それでもそんな世界がやって来る時代はまだ訪れそうにないのが現状だ。

人間の顔を精巧に模したインフォメーションロボットを、上部部分だけ設置してある博物館も海外にいくつか見受けられる。しかしあくまで人間のように動いてみせるだけで、余計な知識や機能は排してある。なにからなにも人間そっくりなロボットなど、夢のまた夢である。

その分、AIの分野は年々研究が進み、多様化している。かつて二世を風靡したボーカル音源ソフトがあった。そのモチーフとなった3D女性キャラクターが、後にコミュニケーション型アプリケーションツールとなる。それでも当時の技術では、昔の美少女ゲーム程度の拙い受け答えをなんとか音声入力でできる低品質だった。

そんな中、大勢の利用者の膨大なレスポンスデータをクラウドサーバーに蓄積して、研究開発に勤しむ有志達が現れる。彼らによって、恋愛に関してのみ先鋭化されたAIが生まれた。そしてそれが、人間をサポートする別のコミュニケーション分野に活かされて、また還元される……という趣のある出来事が日々繰り返されている。

今では様々な擬似人格を持ったアプリケーションソフトが生まれていて、商用だけでなく公共でも利用できるものも多い。

対人矯正のソフトとして開発されたはずが、出来が良過ぎてアプリ中毒を引き起こした症例がある。生身の人間と円滑な会話ができなくなる現代病が、社会問題になったこともあった。その影響で反AI運動が一部のマスコミを中心にして沸き起こると、海外での先例に倣って国内でいくつかの新しい法案が制定されたりもした。

昔に起こったダイヤルQ2騒動や、ソーシャルゲーム課金騒動と似たようなものと言える。こうした事例も積み重なって、AIが嫌いで全く使わずに日常生活を過ごす人も多い。

もちろん都市部と地方の田舎では浸透の度合いも大きく違う。中には佳月勢綱かづきせつなの妹の、あやせ 絢星あやせ みたいに、携帯端末を持っていてもAIアプリを入れていない人間もいる。

佳月絢星の場合は本当に携帯しているだけで、外出で必要な際に、コンビニや公共機関での無線接続サービスを無料で利用する程度だ。同級生の作るSNSのコミュニティにすら入らない、今どきとても珍しい極端なタイプではある。

「だってそんなのない時代の昔の人は、全然触ってなかったでしょ。使ったら使ったで二十四時間、人間関係のしがらみにがんじがらめにされるだけだよ。そんなのヤだし」

絢星の言い分はこうだ。

そのおかげで苦勞することもある一方、理解してくれる友達もちゃんといるとのこと。裏で陰口をいくらか叩かれようとも、実際に耳に入らなければ気にしないサバサバした性格なのもあるだろう。だからか勢綱は妹に人間関係の愚痴や不満を聞かされたことが一度もない。

今の時代だと、AIアプリ相手に日常の愚痴をこぼしてリフレッシュする人も多い。形は違えど、聞き手がいてくれるおかげでストレス解消できるものなのだ。

とみずりゆうが 砥水流河がこのタイプの人間にあたる。

もつとも彼の場合、度が行き過ぎて人間とほぼ変わらない接し方を普段から行っている。

AIアプリを腕時計型の装着型携帯端末で稼働させて、画面を空間に投影させる利用者も少なくない。しかし流河はスマートフォンやタブレットを利用することがほとんどだ。

「昔のギャルゲーっぽくていいっしょ」

と、学校の女の子達から訊かれるたびに笑ってみせる。

佳月勢綱も同じ利用方法だ。しかし流河みたいに他人と会話をしている時でも、AIアプリを常に横で動作させて積極的に会話に参加させるタイプの人間は珍しい。

なので多人数相手の会話のバリエーションを広げるデータとして、日笠に重宝されている。

ちようど日笠^{ひがきひしり}聖石は放課後にPC研の部室で、それらのデータを解析しているところだ。エアコンの冷気がタワーパソコンの密集している方面から、勢綱の座る畳の一角に流れてきて涼しい。閉め切ったガラス窓の外で、夏至の近い初夏の陽射しが裏庭に照りつけている。「梅雨の季節なのに今日は外暑いな〜」

部活が終わって帰る頃には、多少涼しくなってくれているとありがたい、と勢綱は願いながらアイスキャンデーを口にした。画面に向かう日笠も、同じ味のアイスをくわえている。

今日の部室はとても静かだ。キーボードを叩く音とエアコンの送風の音、あとは勢綱が日笠の耳には届かないほど小さな金属音を手元で立てているくらい。

室内には彼女と彼しかいない。入鹿部長と流河、そしてリリの姿はなかった。おかげでいつも以上に部室の中は広々とした印象を受ける。

アイスを舂め終わった日笠が、席を立つと冷蔵庫へもう一本を取りに行く。箱入りの細いミニタイプなので物足りなかったようだ。

夏が近いというのに、相変わらず白衣を夏服の上から被っている。

「今日はパズルをしないのね」

日笠が勢綱の横を通り過ぎる時にふと足を止めて、畳上のテーブルを見た。昼休みにリリが読んでいた、クラスメイトからの貰い物のファッション雑誌が広げられている。

「やってるよ。家にたくさん置いてあったのを引っ張り出してきた」

勢綱は体を起こして、手にしている知恵の輪を見せる。亡くなった祖父が持っていた様々なアナログパズルを、リリの遊び道具として部室に持ってきた、その内の一つだ。

子供の頃に勢綱は全て解いていたけれど、時が経った今は、完全に忘れていたので新鮮だ。

「ジグソーパズルは二人以上でやる方が楽しいし。昔はよく妹と一緒にやってた」

昨日まではテーブルの上に、勢綱が持ってきたジグソーパズルが広げられていた。今日はリリが外出中なので、途中まで仕上げたものをソファの横に移動させている。

「確かにそうね。アナログパズルは他の人と一緒に遊ぶ方が楽しいわ」

日笠は作りかけのジグソーパズルを眺めて微笑むと、冷蔵庫に向かった。

勢綱はプログラミングが全くできない。しかし頭の体操は昔から大好きでよく触れている。流河にAIアプリのリリを紹介されるまでは、スマホのパズルゲームをよくプレーしていた。

リアル系の複雑なテレビゲームは苦手で、課金型のソーシャルゲームも受け付けない。その分、頭や反射神経を使うパズルゲームを、新旧問わずに遊んでいた。

ただ、そういったものをリリにプレーさせると、簡単に最適解を出してしまうので、代わりに勢綱の家の物置にたくさんある、アナログパズルを触らせているところだ。

簡単に解けないのが新鮮なのか、生身のリリもすっかり夢中になっている。

「私も子供の頃は、パズルゲームをよく遊んでいたわ。迫ってくる色とりどりの壁を、手持ちのカラーボールで消していくもの。リリがパズルに興味を示すのも私の影響かしらね」

「俺もやってたよ、それ。子供の頃にうちの死んだ爺さんが、巷のパズルゲームの対戦AIをいくつも造ってくれたんだ、俺の遊び道具として。妹は機械類、大の苦手だし」

珍しい日笠の自分語りにも、勢綱もつい乗ってしまう。

「今度うちのゲーム機引つ張り出して、リリと一緒に遊んでみよう。なつかしいなあ」

昔のことを思い出して、ふと感慨に浸ってしまった。

今日のリリは入鹿部長に連れられて、バスケット部の助っ人で留守にしている。ジグソーパズル作りたいと喚いていたけれど、日笠の説得に渋々頷いて部長と出かけたのだった。

「あんまりあの子に楽しいことばかり教えると、わがままに育つから注意して」

日笠は新しいアイスを冷蔵庫から取り出すと、勢綱に釘を刺して自分の椅子に戻る。

アプリの頃よりも新しく夢中になれる体験が多いからか、最近は勢綱もリリが言うことを素直に聞かなくなっている感じがしていた。

日笠にとつてリリを放課後に外出させているのは、情操教育の一環でもあるらしい。

近頃の入鹿部長はヘルプという名の即戦力で、今日も練習試合にレギュラーで借り出されていた。リリは見学とマネージャーを兼ねての付き添いだ。

バスケット部の本日の練習試合は男女それぞれ他校と試合を組んでいるので、男子の試合でリリはベンチから黄色い声を出す係になっているはずだ。

週の半分は、放課後になるとリリが入鹿部長に連れられて不在になる。

他の部活の生徒達にもリリのことを知ってもらうため、という日笠の考えもあるようだ。

「佳月くん、終わったわよ」

日笠に声をかけられて、勢綱はパソコンの前に向かうと自分のスマートフォンを手にする。

「おっほろーん♪ お昼寝終了☆」

指先のスライドでロックを解除すると、AIアプリのリリが画面内でうんと背伸びをした。

「以前と変わらないようね。データの蓄積も共有も問題なし。ただ、本体が不在だからアップデートしているわけではないけれど。擬似的なものね」

「あれ、リュウガは今日もいないんだ？ あっちのリリは稼働中みたいだけど」

「最近は同学年の女の子達と遊ぶ機会が増えて忙しいのか、週に一、二で来るくらい」

勢綱が手持ちのリリに説明してやる。彼のリリは流河のことを、りゅーちんと呼ばない。

「本体は今日、バスケット部の手伝い。向こうにもリリの入ったスマホは持たせてあるけれど」

「あっちのは、ネットに繋げるようにしたんだよね？」

「生身のリリには、急用の時以外に使わないように私から言っているもの」

日笠が以前のデートの際にリリに手渡したスマホに、AIアプリの方も入れてある。

二週間前、『外出中』の看板が掲げられていたAIアプリのリリを、日笠が再稼働させた。

人間になったリリの様子は、デートの翌日に歩きすぎの筋肉痛で悲鳴を上げていたくらいで特に問題なかった。教科書も届いて、授業中も勢綱に頼らずに受けられるようになっていた。

休みの土日を利用してリリを部室に連れてきて、日笠が入念にチェックしながらアプリを再稼働させた結果、今のところ本体に特に悪影響もなく動かしている。

長らく不在だったA Iアプリのリリの帰還に、利用者の喜びの声がネット上に溢れていた。

「うん、わたしこの服、大好きだなー！ 前のと違ってアイドルっぽいところもいいね！」

そう言っただけでアプリのリリがくるくると、勢綱のスマホ内で回ってみせる。

今回の使用停止措置の解除に伴う補填サービスで、いくつかのコスチュームとぬいぐるみが追加された。そのうちの 하나가今、アプリのリリが来ている洋服のただけ——

「あまり深く追求しないで。許可はきちんと取ってあるから」

どうみてもこの前のデータの尾行で、日笠が身につけていたものしか見えない。一応、洋服メーカーとのコラボレーションという形だそう。追加されたぬいぐるみも同じだった。

「でもリュウガが部室にいないと、なんだか違う場所みたいだね」

アプリのリリが感想を漏らすと、勢綱は肩をすくめる。

A Iアプリが再稼働してからは、流河が部室に足を運ぶ頻度がかなり減った。

昨年にも女生徒達の遊びの付き添いで、留守にすることは何度かあった。とは言え、ここまでの回数が減るのも珍しい。勢綱が本人に尋ねても、また今度と、とお茶を濁されるばかりだ。

「リュウガはリリのこと嫌いになったのかな……？」

「生身のリリもこないだ同じことを言ってたな」

鼻を掻いて、勢綱が心配させまいと答える。

「A Iアプリも復帰したし、生身のリリとの距離感に悩んでるんだろ。これまで通りに接していれば全てうまくいくわけでもないから、対人だと。相談される時まで、そつとしよう」

これまで流河が女友達とのつき合いで苦労してきた面を勢綱は知っているだけに、深く追及する気も起きなかった。

「人間ってなんだかめんどくさいねー」

アプリのリリが大変そうに言うと、横でやりとりを聞いていた日笠が苦笑した。ちなみに流河のリリのアプリデータは、後で一括して確保できれば構わないそうだ。

「私には鳩頭にしか見えないけれど、砥水くんは」

引きずらないタイプなので、すぐに戻ってくるだろう。

そこで勢綱はふと、新しい洋服姿のアプリのリリを目にして、はたと思い当たった。

「あれじゃない、リリの胸がアプリと違って、ちょっと大きいのが受け付けなかったとか」

何となしに言ったつもりだった言葉が、日笠の胸に深く突き刺さる。

「あなたは私に喧嘩でも売っているの？」

「違う違う！ ぱつと見で、二次元と三次元の違いがあるとしたらそこぐらいのこと」

殺意の籠った目を向けられて、勢綱は慌てて否定した。

「でもどうして生身だとリリの胸の部分だけ、アプリ通りじゃないのかな？」

AIアプリの方に設定項目がなくても、セルフ改造すれば体型の変化もできなくはない。「知らないわ。こちらを向いて話かけてこないで」

まだこの話を続けられるのが嫌なのか、日笠は完全にそっぽを向いてしまった。

仕方ないので勢綱はスマホを手に、元いた畳の席に戻る。知恵の輪の続きに入ろうと手を伸ばしたところで、突然ガラリと音を立てて、部室の扉が開いた。

部長達か流河だと思つて勢綱が顔を上げると、一人の男子生徒が室内に入ってくる。

「あの、誰ですか？」

見かけない顔に勢綱が訝しんでいると、後ろから連れの男女生徒二人も入室する。

「僕は生徒会の者だ」

そう言つて先頭の男子生徒は、黄色の布地にこの学校の校章のロゴが入った腕章を見せる。

「生徒会長がわざわざ直接来室だなんて、ご足労なことね」

「えっ、生徒会長？」

彼らを見定めする日笠の言葉に、勢綱はオウム返しに反応する。

「そんなにかしこまらなくていいよ。別に部室の使用中止とか、悪い話をしにここへ来たわけじゃない。あと後ろの二人は書記」

にこやかな笑顔で生徒会長は勢綱達の警戒を解く。後ろのペアもぺこりと頭を下げた。手に録音用の機材を持つていて、会話を後で書き起こす役目のようだ。

生徒会長は広々とした部室内を見回すと、勢綱に声をかけた。

「架橋リリさんって、いるかな？」

「はいはい、わたしのこと？」

テーブルのスマホスタンドに勢綱が立てかけた、AIアプリのリリが名前を呼ばれて元気よく手を上げる。不意を喰らった生徒会長は目を丸くした後、横に手を振った。

「そういえば同じ名前だったね。悪い、そっちじゃなくて学校の生徒の架橋リリさんなんだ」

「えー、こっちもリリと同じ架——」

慌てて勢綱はスマホに手を伸ばして、電源を切る。話をややこしくしても仕方がない。

勢綱は謝りながら靴を履くと、ソファ横に立ってかけてある来客用のテーブルを設置した。

洋椅子も用意しようとする、生徒会長が目についた一つを自分で手にして、腰掛ける。書記ペアは会長の後ろで立ったまま、ジュエスチャーで必要ないと勢綱に伝えた。

「で、そうだな、架橋リリ君なんだが——」

「なにかまずいことでもやらしましたか。転校してきてから一ヶ月近く経ちますが、校内で色々お騒がせしてるみたいで……」

冷や汗を垂らしながら、勢綱はこの一月を振り返る。

昼休みや放課後で部室にいる時は問題なくても、登校中や授業中、休み時間には目立つ行動を起こすことが多い。先週も登校中に見つけた野良猫を勝手に校内に入れて、先生達や生徒会

と騒ぎになっていた。

「ああ、猫騒動の時は悪いことをしたよ。結果的に飼い主が見つかったので、よかった」
頑なに拒否したリリに同情した生徒達が追従して、授業をボイコットしようとする動きになりかけた。幸いその猫を飼いたいという女子生徒がいたおかげで、事なきを得たのだった。

「リリのやつ、動物を見るとすぐ夢中になるの」

ただし完全な人間じゃないせいか、犬や猫には物凄く警戒される。そんな中で唯一懐いた野良猫だったので、情が移りすぎたのだろう。

「あの子はどこにいても目立つから」

パソコン前で自分の椅子に座っている日笠が、相槌を打つ。

「確かに学校内でよく耳にするね。さっきのアプリと見た目がそっくりなのもあるけど」

生徒会長が笑って話す。日笠は少し眉を寄せただけで、なにも言わない。

「おっと失礼、話を戻そう。来週、期末テスト前に校内美化週間があつてね。学期中に溜まった校内の汚れを落とそうと毎回実施してるんだが」

ああ、あれかと勢綱はすぐに思い当たる。学級委員は学期末になると、放課後に校内の掃除に駆り出されて大変だと聞いた。幸い、勢綱がこれまで委員になったことは一度もない。

「ポスターを毎回掲示しているのは知ってるかい？」

校内の掲示板なんてじっくり見る機会もあまりないので、勢綱の記憶も曖昧だ。

「で、その今学期のポスターのモデルに、架橋君を使いたいという話が会議内で出てね」

「はあ。あれって毎回生徒会でデザインしてるんですか？」

「そうだよ。頒布物を扱う役職もちゃんとある。で、話し合いの結果賛成多数で可決してね、本人に協力してもらおうと足を運んだというわけさ。いつもここに居るみたいだからね」

「確かにリリは目立つから、そういうのに向いてるのかもしれない……」

生徒会の決定も一理ある、と勢綱は頷く。転校生だし、ポスターも目を引きやすい。

「モデルと言つて、なにをさせるつもり？ なるべくそつとしておいてほしいのだけど」

日笠が厳しい口調で言い放つ。その視線を柔和に受け止めて、生徒会長は穏やかに笑った。

「校内の掃除をしている写真を撮らせてもらうだけだよ。着替えてもらう必要もないし、時間と手間は取らせないから。同伴してもらっても構わないよ、一時間もかからないはずだ」

その案には一分の隙もない。感情で反論しようにも難しいので、日笠も黙っている。

「ちよつと今日は、部長と一緒にバスケット部のヘルプで出かけていて、戻るのも遅いので帰ってきてから本人に訊いてみる形でもいいですか？ 後で連絡入れますので」

「そうだな。僕達にも所用があるし、そうしてもらえると助かる。連絡先は生徒会のメールで構わない——行事プリントに書いてあるけど、今アドレス交換してもらった方が早いかな」

生徒会長が言うと、後ろの書記女子が一步前に出て、メールアドレスの交換を促してくる。

勢綱は了承して自分のスマホを手にすると、手早く済ませた。

「それじゃ僕達はこれで。いい返事を期待しているよ」

席を立った生徒会長は勢綱に握手を求めてくる。並んで立つと勢綱よりも背が大きく、入鹿部長より高いかもしれない。清楚よく整えられた短髪といい、振る舞いにも気品が漂う。少し気圧されつつ、勢綱は生徒会長と握手をした。

「日笠君、架橋さんに宜しく」

生徒会長は去り際に日笠に声をかけてから、書記二人を連れて部室を出ていった。

室内にまた静寂が戻る。突然の来客に気の張っていた勢綱は、大きく息を吐いて畳の上に身を投げ出した。アプリを起動させるとリリに色々言われそうなので、放っておく。

「日笠さん、生徒会長と知り合い？ 名乗ってなかったよね」

「知り合いつてほどでもないわ。昔、近所に住んでいただけ」

少し気になったので尋ねると、日笠はそれだけ答えて、椅子ごとパソコンに向き直った。

そのまま下校時刻のチャイムが鳴るまで、部室には知恵の輪の金属音とクレーラーの送風音、それとパソコンの動作音しかしなかった。これからどうしようか勢綱が迷っていると、日笠のスマホからメールの着信音が響く。中身を確認した日笠が、勢綱に声をかけた。

「今日は戻るのが遅くなるから、先に帰っていいって入鹿から。リリは入鹿がそちらの家に大事に送り届けるそうよ」

「入鹿部長なら大丈夫かな……。モデルの件はどうしようか」

「明日にでも、リリがここに居る時に改めて説明しましょう。砥水くんは……。居なくても特に問題ないわね」

そんな、ひどい……。と心の中で苦笑しつつ、勢綱も下校の準備を始めた。

※

「いいよー！ モデルかあ……。どんなことするんだろう、楽しみだなー」

「いいなー、わたしもやりたいなー。リリだけずるいよー」

翌日の放課後、二つ返事で安請け合いたリリはすっかり浮かれ気分だ。そんなリリを羨ましそうに、勢綱のスマホに入ったアプリのリリが駄々をこねている。

「あんまり期待しない方がいいと思うけど……。雑誌のモデルみたいな撮影にはならないよ」

「そうなの？ これみたいに決めポーズ取ったりしないの？」

リリが同級生の女の子にもらった雑誌のページを開いて、勢綱に突き出してくる。

「ファッション雑誌と校内清掃のポスターを比べてもなあ……。」

「そう言えば報酬を訊いていなかったわね」

日笠が当然のように発言する。勢綱はびっくり無償だと思っていたので、面食らった。

「そうだった。じゃあOKのメール送るついでに教えてもらおう」

生徒会にモデル了承の件と合わせて送信すると、五分もしないうちに返事が返ってきた。

「学食の券だつて。一週間分。混雑用の特等席付」

「生徒会長、ふとつぱら」

「どうして入鹿部長がよだれ垂らしてるんですか」

「でも一人で学食に行かせるのは不安だし、みんなで一度に使うのがいいかもしれないわね」

「えー、わたしのなのにー」

「リリもたまには周りに奉仕することを覚えなさい。ギブアンドテイクよ」

日笠に諭されてしゅんとするリリ。この一月、ずっと周りの人から物をもらってばかりだったので、それが当然に思ってしまったている節もある。はじめをつけさせる意味でいいかもと、勢綱も領いた。入鹿部長も続いて領くので、リリは渋々日笠の提案を呑むしかなかった。

「撮影は今日でよければ、十分以内に準備して来るつて。まだ梅雨だし、明日から天気崩れるつて予報だから、なるべく晴れの日に撮っておきたいみたい」

勢綱は部室の外に目をやる。晴れ模様でも風が強く、ガラス戸がガタガタ音を立てている。

「今日は特に用事もないし、これから来てもらいましょうか」

「うん、善は急げだね！」

日笠とリリがそう言うので、勢綱が再度メールを送る。すると本当に十分も経たないうちに昨日の書記ペアが、担当の役員生徒と写真部のヘルプ数人を連れてやってきた。

「あなたが架橋リリさん？ 噂には聞いてましたが、とてもかわいいですね……」

「うわー、リリちゃんだー！ やっべ、マジやっべ」

「こらそこ、勝手に写真を撮らないで」

生身のリリを目の前にして、担当の女子役員と写真部のカメラマンが興奮気味に食いついている。他の生徒達も見惚れていて、こんなに人気があったのかと勢綱達は驚いた。

埒があかないので、日笠は入鹿部長に矢面に立つてもらって、場を落ち着かせる。

始めるにあたって、生徒会の役員達から場所や小道具など、撮影にあたっての注意点を事前に聞かせてもらう。旧校舎、校庭、校舎の三箇所掃除用具を手持って撮影して、後ほど生徒会会議でベストショットを選ぶ形になるそうだ。

「今から固まっついても疲れるだけよ。じゃあ、行きましょう」

話を聞いただけでガチガチになっているリリの肩を、日笠が軽く叩く。緊張の緩んだリリが柔らかい笑みを浮かべると、写真部の連中がまた勝手に横からカメラで撮っていた。

そして翌週。校内の掲示板と廊下の壁に、美化週間のポスターが何枚も貼られていた。

「すっごく評判いいんだよー、あのポスター♪ なんだか芸能人になったみたい」

放課後、すっかり浮かれ気分のリリが事あるごとにポスターの話題を口にしてている。

「俺も撮影の時一緒にいたかったわー、マジ残念だわー」

畳のテーブルに突っ伏した流河が、これまた何度目かの愚痴を漏らす。

「部室来てなかったんだからしょうがないだろ。あと、報酬の学食券はもう使い切った」
「ちよつ、ソレマジで聞いてねーぞ！」

「昼休みにも他の女の子達と、どこかで飯食っていたお前が悪い」
「だからそーゆーのは先に言えって……」

本気でしょんぼりとしている流河の背中を、リリがぼんぼんと叩く。

「じゃあ明日みんなで食べよ♪ 学食」

「期末テストも近いから、私達は予習で行かないわよ。テスト期間中は学食も閉まるわ」

「食堂は昼休み中、ずっと人も多いし。なるべく部室でパン食べてる方がいいよ」

「そんなあ。みんなと一緒にごはん食べたいよ」

「おいリリちゃんを泣かすなよ、勢綱」

なぜか流河に責められて、勢綱は困惑する。

ともかく、ポスターの評判がいいのは確かだった。

採用されたのは裏庭でほうきを持った写真で、普段リリが見せない物憂げな表情が夕日と相成って、一枚の絵画のような雰囲気醸し出している。

評判が良すぎて、誰かが勝手に貼られたポスターを持ち去るケースもあった。

アプリのデータを転送していた日笠が手を止めて振り返ると、流河に満面の笑みを向ける。

「砥水くんは盗つてないわよね、ポスター？」

「ははは、まさかそんな……写真部に言い値で交渉したけど、生徒会に怒られたし」

指摘されて、ひどく動揺する流河。察するに、裏取引で手に入れているのかもしれない。

「わたしは写真撮られるの、嬉しいけどなー。担任の先生に断りなさいって怒られちゃった」

「盗撮する人間もいるんだから、もう少し警戒しなさい」

「えー、そんな人、この学校にはいないよー。みんないい人だもん」

厳しめの口調で日笠に注意されて、リリは頬を膨らませる。AIアプリこみの性善説も、度が行過ぎると問題を起こしそうで、危ういものだ。

「なにかあってからだと遅いのよ。もう少しあなたは——」

心配する日笠がリリを叱りつけていると、突然、部室の扉が勢いよく開いた。

「ここに架橋リリはいるかー？」

固い口調の女性の声が室内に響き渡る。先生の誰かかと思つて勢綱が振り向くと、生徒会の腕章をつけた凛々しい顔の女子生徒が、厳しい目で部室内を睨みつけていた。

ウェーブがかった、軽めの色合いをした長い髪。制服の生地を隆起させる豊かな双乳、太股のラインを食いこませているニーソックスと、実にセクシナルな体型をしている。

「えっと……誰でしょうか？」

「このところ生徒会のメンバーと顔を合わせる機会の増えた勢綱でも、見覚えがない。

「誰とは失礼だな、貴様こそ誰だ」

「いきなり部室に入ってきてそれはないでしょう。この部活の部員ですけど」

勢綱が言葉を返すと、氷のような視線で睨み返された。思わず背筋が震え上がる。

「生徒会副会長ね」

二人のやりとりを見ていた日笠が、椅子に座ったまま答えた。ふむ、と副会長も頷く。

「その副会長様が何のご用でしょうか？」

なにも怒られることはしていないので、彼女がどうしてそんなにキリキリしているのか勢綱にはさっぱりわからない。一応下手に出て尋ねてみるものの、副会長は勢綱を無視して部室を一瞥すると、大きな歩幅でリリの元へ詰め寄った。

「架橋リリだな」

「そーだよー。みんなの人気者、リリちゃんです☆」

浮かれ気分のままリリが答えると、副会長は歯軋りしてリリの顔に人差し指を突きつける。

「架橋リリ、この漁火紗世梨（いさりびさより）と勝負しろ！」

「は？」

突然の展開に勢綱は変な声を漏らした。指差されたリリも目を丸めて、首を傾げている。

「なになに、勝負ってなにをするの？」

面白そうとばかりに、興味津々にリリの隣で身を乗り出す流河。

「勝負は勝負だ。貴様とこの私、どちらがこの学校を代表する女子生徒にふさわしいかだ！」

言っていることが突飛すぎて、勢綱の口からは生返事すら出てこない。

「学校を代表するって、それってミスコンみたいなの？ さよりん」

「話が早いな。あとさよりんって呼ぶな、馴れ馴れしい」

今の話で即座に理解したのか、流河は副会長と話を通じている。

「第一、一学期はもうすぐ終わりでしょう。突発のイベントなんて開けないわ」

「甘い日笠。今年は一学期の期末テストの後に、すぐ休日がある。そこで執り行う」

「わざわざ休みの日に、学校で？ 他の生徒達も来ないでしょ」

「ねーねーりりゅーちゃん、ミスコンってなあに？」

「ミス・コンテストのことさ。要は美人コンクールみたいなもの」

ミスコンの単語が脳内検索に引っかかるなかったのか、リリが流河に説明を受けている。

「リリをそんな下品なイベントに出すつもり？ 私は反対よ」

「まあそう急ぐな日笠。みたいなものだ。ファッション審査はただの一項目でしかない」

反対の声を上げる日笠に、副会長は手のひらを突き出すジェスチャーで静止する。

「様々な課題で女子生徒の器を競い合う勝負だ。期末テスト後の生徒達の余興として、開催したい。それなら生徒会や教師側の許可も得られるだろう」

「だろうって……会議してないんですか？」

言われてみれば今日は副会長の後ろに、生徒会の書記。アが居ないことに勢綱は気づいた。

「相手の同意をもらってからのの方が事を進めやすいと思っただけ……」

少し焦った様子で、自分の顎に手を当てる副会長。どうやら独断で動いているらしい。

一気に信用がなくなると、日笠達は冷たい目を向けていた。

「それならなおさらその勝負を受けるわけにはいかないわ。リリをあなたの個人的な優越につき合わせる必要がないもの」

「んー、わたしはいいけど？」

「リリ！ 人の話聞いている!!」

「だってみんなが楽しんでくれるイベントなら、それでよくないかな？」

リリは透き通った目で、率直な意見を口にする。

日笠が悩ましい顔で固まっていると、ソファの方から大きな物音が上がった。

室内の全員が一齐に振り向くと、素足の入鹿部長が床の上に転がっている。副会長が来る前から眠っていたのか、寝相の悪さでソファから落ちたようだ。

入鹿部長はきよろきよろ見回してから、なにも言わずに再びソファの上で包まろうとする。

「ちよっと、無視しないで姉さん！」

その態度に副会長が声を荒げると、入鹿部長はそちらに瞼の落ちた目を向けた。

「姉さん!? 入鹿（いるか）部長が!?!」

驚いているのは勢綱とリリの二人だけだ。

「漁火（いさりび）、ってさっき自分から名乗ってたでしょう」

「なんだ知らなかったのかよ勢綱。さよりんは日笠と同じ理系クラスだからな」

日笠が顔見知りなのは当然で、顔の広い流河も他のクラスの有名な大抵知っている。

「二人は姉妹だったんだね！ 同じ苗字でも関係ない人って多いから、わからなかったよ」

リリは恥ずかしそうに、照れ笑いを浮かべた。

「確かにおっぱい大きいところとか、グラマーなところとか似てるねー」

「そんな近くでジロジロ見るんじゃない！ 校規の風紀良俗に反するぞっ」

興味津々にリリに見回されて、生徒会副会長こと漁火紗世梨は顔を真っ赤にする。

「ま、まあいい。今日は架橋リリに用事があったのだ。私との勝負を受けるということでもいいのかな？」

呼吸を整えてから、改めて副会長はリリに勝負を挑む。騒動に興味ないのか、入鹿部長は再び昼寝に入った。リリを除いた部員三名はどうしようか、顔を見合わせている。

「多数決っていうのなら俺は一応、反対に入れるけど……リリにメリットもないし」

「なら二対一で決まりね。丁重にお引取り願いますよ」

「ちよ、オレにも訊けよ日笠。これって学校行事みたいなもんだろ？ だったら他の子も参加

OKにしねえ？」

また変なことを思いついたと、勢綱は冷たい視線を流河に向ける。

「さつきリリちゃん、みんなが楽しんでくれるイベントって言ってたじゃん。じゃあ校内一の女子を代表で決めるってことにして、エントリーを受け付けてさ。盛り上がるの間違いナシ」「なにを馬鹿な！ これは架橋リリと私との神聖な一騎打ち——」

「んなコト言っても生徒会がOK出すわけねーでしょ」

二人の個人的な勝負で行事開催を提案しても、会議を通過するのは難しいと副会長も感じているのだろう。流河のアイデアに反論できずに齒軋りしている。

「入鹿も出る」

「ふあっ!？」

不意に背中から声をかけられて、副会長がその場で飛び上がる。

「なっ、なに……姉さん勝手に決めないで!」

「ひじりも出ればいい。これで最低四人、少なくとも見世物になる」

ソファで包まったまま、入鹿部長が淡々とアイデアを出す。

「え、ちよつと入鹿、無理よ私、そんなの」

副部長と日笠は、困惑した表情で互いに目配せした。

「みんなも出るの？ 楽しそう!」

「姉妹対決も一緒にやるなら盛り上がると思うぜ。うちの部長は他の部活によく助っ人扱いされてるから人気あるし。ただテスト明けは用事入ってる子も多そうだし、他に参加者いないかもしんねーけど。リリちゃんのお守りで日笠も出れば格好は揃うっしょ」

「こういう時に限って頭が回るのよね、この人は……」

流河の発言に呆れた様子で日笠は額に手を当てる。諦めた顔で、副会長に目線を促した。

「仕方あるまい……ではこの四人をはじめとしてイベントを執り行う形で、早速提案してこよう。時間を取らせた、すまなかつたな」

渋々提案を受け入れた副会長は、善は急げと踵を返す。そこでふと足を止めた。

「おっとそっだ、これがイベント案だ。一読しておいてくれ」

忘れていたと、懐から折り畳んだペーパーを取り出す。そこにはリリとの対決案がいくつも鉛筆で書き殴られていた。本当にただの思いつきには見えなくて、勢綱は少し心配になる。

「あの、副会長はどうして急にリリと勝負したいって思ったんですか？」

突拍子のない話の連続でここまで本題を訊くことを失念していたので、尋ねてみる。

「生徒会……いや、ポスターを見て、とでも言うっておこうか」

それ以上はなにも言わずに、副会長は大股で部室から退出していった。

「私達の言質を取るだけだったけれど、会議大丈夫なのかしら」

「ま、なんとかするんじゃない？ まるで嵐のようだったな」

日笠と流河は肩をすくめて、勢いよく閉められた部室の扉を見つめていた。

「知力体力時の運、最重要は女子力……」

リリがテーブルに広げられた、先ほどの副部長のペーパーを覗きこんで、朗読する。あまりに簡潔すぎて、本人以外さっぱり解読できない代物だ。

「急遽決まったものだし、大掛かりなイベントにはならないと思うけれど。しかし入鹿の妹さんには困ったものね……行動力が人一倍あるから、次期会長候補なのだけど」

日笠がまいった顔で、はあ、と大きなため息を吐き出す。

「二人とも、特訓」

テーブルを囲んだ勢綱達の前に、いつの間にか入鹿部長が立っていた。

「ひゃっ!? と、特訓って?」

「まずは体力づくりから。はい、ジャージ」

いきなり畳んだジャージの予備を手渡されて、日笠はうろたえる。今日は窓の外も雨だ。

「だいじようぶ。専用のロードワークがある。ほら、リリも」

「特訓……そうだね、勝負には特訓がつきものだね! よーしやるぞー!」

家で絢星が読んでいたスポ根勝負漫画に影響を受けたのか、リリも目の中に炎を宿してすっかりやる気に満ちている。入鹿部長と二人で日笠の両腕を掴むと、そのまま着替え用の隣の空き教室へとずるずる引つ張っていった。

「え、え、私はまだ今日やることがあるのに」

びしゃん! と扉の閉まる気持ちいい音がして、部屋には男子二名が取り残された。

「俺達が出る幕はないな……イベントの宣伝手伝うくらいかな」

勢綱はやれやれと体を伸ばして、畳の上に身を投げ出す。

「リリちゃんが勝てるように、オレ達も後押ししなきゃダメっしょー」

「そう言われてもな……勝負に勝ったところでなんの利点があるんだ?」

「まずオレが嬉しい! あと学校中の人気者になって、文化祭でも他の学校から客呼べるぜ」

「面倒が増えるだけじゃない? リリはこっちの世界のものはなんでも楽しいみたいだけど」

やる気のある流河とは対照的に、乗り気でない勢綱は寝返りを打つ。

リリは家に居る時も漫画を読んだり、絢星と一日の話題を喋ったりと充実している。

特に絢星は、人間になったリリに対してスマホの時とは違って、日に日にやさしく接するようになってきた。新しい家族ができたようなものだと思っっているのだろう。

「リリは少しづつクラスには馴染んできたけど、まだ一人で他の生徒と行動するとかあまりないし。変に持ち上げられるより、もうちょっと他の女の子達と仲よくなれればと思うな」

「クラスに馴染んでないオマエがそれを言うかー」

「俺のことはいいよ、変人扱いで。流河の腰巾着程度の立ち位置がちようどいい」

「ほんとオマエとは昔っから、なんでかずーっと同じクラスだもんな……」

完全に腐れ縁と言うやつだ、と勢綱は苦笑する。

人当たりがよく、男女問わず同級生から人気のある砥水流河とは違って、佳月勢綱は昔から

目立たない人間で、何でもソツなくこなせるタイプだ。

「子供の頃から、手間のかからない子だって親によく言われる」

だから高校に入る時も、空き家になっていた亡き祖母の家での一人暮らしも簡単に許可がもらえたし、妹の絢星もよく泊まりに来ていた。リリが居候を始めてからは、絢星が兄の見張りの意味合いも含めて、週の大半を三人で過ごしている。

もちろん、この部員以外にそのことは内緒にしてある。知られたら大騒ぎだ。

勢綱は上体を起こして、副会長に渡されたペーパーを手にすると、話を本筋に戻す。

「手伝おうにも、これだけ読んでもどんなことをやろうとしてるのかわからないな……。知力は元A Iアプリのリリに敵う相手なんていないし、体力はずっと入鹿部長が放課後に面倒を見て、運動のメニューを組んでやってる。時の運……は置いといて」

何か言いたそうな流河をよそに、勢綱は咳を一つついて、話を続ける。

「最重要の女子力……これは問題あるけど、男の俺やお前が教えるものでもないでしょ。部室の他の女子二人に教われるかどうかは、これまた置いといて」

本人達が居たら絶対に怒られそうだと、内心苦笑する。

「あと、グラビアコンテストがあるんじゃないかね？ さよりんもそんなこと言ってた」

流河の意見に頷くも、興味がないのであまりピンと来ない顔だ。

「もし水着審査なら日笠が凄く怒りそうだなあ……大丈夫かな、副会長」

「それならいいアイデアがあるぜ！ 絶対に勝てるやつな！」

突然流河が大仰に胸を張って、親指を自分に向けてみせる。

「なんだよ、ヘアヌードとか言ったらぶっとばすぞ」

「違うって！ えつとだな……」

流河が顔を近づけて耳打ちすると、勢綱は目を丸くして相槌を打った。

※

期末テストが終わった後、週末の天気は全体的に晴れ模様だ。ちようど全国的に梅雨明けが発表されて、土曜の今日も適度に雲がある、爽やかな初夏の天気だった。

校内の生い茂った木々からセミの声も聞こえ始めている。七月なのでまだ数が少なく、それほど騒がしくもない。夏本番になると大合唱になるだろうと、陽射しの下、帽子を被った勢綱はうちわを仰ぎながら思う。

校庭の一角に簡易の舞台が設置されていて、椅子の並べられた客席には大勢の制服姿の生徒達が、イベント開始を今か今かと待ちわびている。

その中に佳月勢綱と、砥水流河の姿もあった。流河は私服の短ズボンを着いていて、足もサングラスだ。夏休み中に部活に来る時も大抵この格好をしている。

アイスキャンデーをくわえた勢綱は、日焼け防止に首にかけたタオルで伝う汗をぬぐう。わいわいと賑わう客席を見回して、ほへーと呟いた。

「よっぽど暇人多いんだな。もつとこじんまりとしたものだと思ってたぞ」

「つき添いの教師もいるし、ガチのイベントになってるなコレ。客席百人は超えてねえ？」
「百どころか優に百五十は超えている。この高校の全校生徒が九百人弱なので、二割近くわざわざ休日に登校してきている形だ。女子生徒も結構いるのは、他の参加者の応援だろうか。」

副部長の提案したイベントは、期末テスト終了後の生徒達へのごほうびとして無事開催されることとなった。この学校の生徒会は企画が通ると、準備にとりかかるのが物凄く早い。

数日で用意したとは思えない、巨大な専用の横断幕が、舞台の前に飾られている。

「三年の女子陸上部の部長と、一年のかわいい子もエントリーしてくれたから、リリちゃん達と合わせて計六人。結構いいバランスなんじゃねえ？」

「流河が引つ張ってきたんだろ？ 本当に顔広いなー……」

参加者を募る生徒会と一緒に動いたとは言え、学年の垣根はどこへやら。

「陸上部の部長はうちの部長も仲いいし。一年の子は男子の話題になってたから連れてきた」
知名度のある女子を引つ張ってきたその手腕を見て、将来イベントにでもなればいいんじゃないかと、勢綱は流河を横目で見ながら思った。

「そろそろイベントを始めたいと思いますー。観客の方は着席をお願いしますー」

生徒会役員が拡声器で伝えると、客席からまばらな拍手。すでに席の八割は埋まっていた。

舞台の袖から男子の司会進行役と、女子の解説員が並んで登場して、自己紹介を行う。司会は放送部から、解説は演劇部からそれぞれ選ばれている。

「流河はやらないんだな、司会」

「だって暑いじゃん。オレほんと暑い苦手なんだよね」

そう言っ流河は、用意した麦藁帽を深く被る。胸ポケットにかけているサングラスをかけるのは、これから登場する女の子達を肉眼で見たいからだろう。

「それでは参加者の紹介です。まずは一番——」

舞台横のスピーカーから流れるBGMに合わせて、女子陸上部の部長が舞台上に登場する。

彼女が体操着を着ているのは、客席の制服姿の生徒達と参加者を区別するのと、この後に行われる、体力勝負の競技種目のためだ。

「陸上部部長三年七組、城崎三咲（しろさきみさき）。体育会系を代表してきましたー」

客席から拍手が起こって、三咲先輩は応援に来た部員達に、笑顔で手を振っている。イベントが終わってから、陸上部は午後このまま部活に入るのだろう。

軽い自己紹介が終わると、次に二番手の一年生女子が壇上に登場する。背丈は平均より少し低くて、体力はあまりなさそうだ。小さい鼻と整った顔立ちが西洋人形のように、かわいい。

「二年四組、箱根紅（はこねべに）です。えっと、がつ、がんばります……」

おどおどした態度でぺこりと頭を下げる。少しあざとい雰囲気魅力的だ。

熱狂的なファンがいるのか、客席の前の方から男子生徒達がコールを飛ばしている。あれだと同学年の女子からはあまりよく思われてないかもしれないなあ、勢綱は苦笑した。甘ったるい声で彼女の自己紹介が終わると、次は生徒会副部長の入場だ。

「エントリーナンバー三番、みんな知ってる生徒会の漁火紗世梨副会長だー！」

司会その声を受けて、副会長が背筋の伸びた優雅な歩き方で舞台中央にやってくる。常に威圧感を放っている副会長は、お姉さまタイプで男子より女子生徒に人気が高い。

「今回は私の発案で急遽開催されたこのイベントだ。客席のみんなには最後まで楽しんでいってもらえるようなものになりたい。応援、よろしく頼んだぞ」

自己紹介の後に意気込みを伝えると、客席から黄色い声が上がった。

「バラとかくわえるの似合いそうだな、さよりん」

流河の言うように、演劇で男装した姿が、容易に勢綱の脳裏に浮かびあがる。

「副部長の次は四番、PC研の日笠聖石さんですー」

これまでよりやや低めのテンションで司会に紹介された日笠が、舞台袖から姿を現す。

特に有名でもないので、拍手もまばらなのは無理もない。しかし同じ理系クラスの女子達がいるのか、席から黄色い声援が飛んでいた。流河も勢綱の横でゲキを飛ばしている。

「よ、よろしくお願います……」

日笠は顔を赤くして手短に意気込みを伝えると、そそくさと副会長の隣に移動した。人前に立つのが苦手なんだなあ、勢綱は微笑ましくなる。

「エントリーナンバー五番は、副会長のお姉さんでもあるPC研部長の、漁火入鹿先輩です」

少し緊張した面持ちで司会が紹介すると、入鹿部長が姿を現す。でかい。

横でマイクを持つ司会の男子よりも頭一つ分高いので、客席の生徒達も驚いている。

「それでは、意気込みのほどを一言」

「がんばる」

簡潔に一言だけ述べると、入鹿部長は日笠の隣にさっさと並んでしまった。

「こほん。気を取り直して……最後にエントリーナンバー六番、先月この学校に転校してきたばかりの帰国子女、二年生の架橋リリさんですー！」

「みんなー！ 朝からおっほろーん☆」

司会の紹介とともに元気よく舞台の袖から飛び出すリリ。いつもの挨拶で両手を振って客席に応えている。生徒達がざわつくのは、やはり胸が少し大きい以外、どこをどう見ても、AIアプリのリリと見てもくれも性格も、完全に同じなのもあるからだろう。

別学年の生徒達もリリのことを噂には聞いていても、こうしていざ大勢の人前に現れると、そのそっくりさに驚きを隠せない。司会と実況の二人も同じで、思わず身じろぎしている。

「本当にアプリとそっくりなんですわー、リリさん。名前も同じで」

「そうなんですよー、びっくりですねー。せっかく名前が同じだから、格好も同じにした方が面白いかなーって思ったんですよー」

リリは元気に答えると、後頭部の髪飾りを両手で触ってみせる。誰かにそっくりと訊かれた時には、こう返事するように、前もって日笠に教えこまれている。

「喋り方もそっくりなんですね……で、では意気込みのほどを」

「副会長のさよりんに勝てるようにがんばりまーす！ 応援よろしくおねがいしまーす☆」臆面もなく名指したので、客席は更にとよめく。副会長ファンの女子達はもちろん怒った顔だ。しかし他の観客には受けがよかったのか、大きな拍手で迎えられている。

「副会長、なにか一言！」

リリの挑発を受けて解説の演劇部員がマイクを向けると、睨み返されて思わず声を上げた。

「もともとこのイベントは私と架橋リリとの勝負で企画されたものだ。なので絶対に勝つ」

差し出されたマイクにそう答えると、副会長はリリの前に立った。

真剣な顔で見下ろす副会長の視線を、涼しげな顔で怪訝そうに流しているリリ。

一触即発の状態に、客席は開始前から大盛り上がりだ。

「そ、それでは第一回、ミス垣根澤（かきねざわ）高コンテストの始まりです！」

慌てて司会が開幕の宣誓を読み上げると、ポンポンと周囲で打ち上げ花火の音が鳴った。

一旦壇上から全員が下がった後に、生徒会役員達によって、最初の競技の準備が始まる。

「結構楽しいイベントになりそうな予感♪」

流河はすっかり浮かれ気分だ。勢綱は呆れた様子で、手元のプログラム用紙を確認する。

知力、時の運、体力、女子力勝負と続いて、最後に衣装コンテストの順に組まれている。

体力勝負はグラウンドを使うので、生徒達も客席から移動する形になる。休憩前に組まれているのもそうした理由だ。

「優勝候補はやはり副会長になるんですかねー。スタイル抜群成績優秀、隙がありません」

「個人的には真っ向勝負を挑む架橋リリさんにも期待ですね。なにしろ未知数ですから」

誰が優勝するかを、司会と解説の二人が客席の意見も聞きながら予想している。

その合間に舞台の設置が完了して、競技者の六名が再び壇上に拍手で迎えられた。

昨年の文化祭のクイズ大会で使用して、倉庫に閉まっておいた専用の解答席までわざわざ引っ張り出されている。かなり本格的だ。

「最初のコーナーは知力勝負です！ 問題は全十問。こちらが出題する問題をフリップに答えを書いて頂きます。ボケるのは構いませんが、点数は入りませんので注意してください」

司会の説明に、客席から少し笑いが起こる。真面目な日笠は周りを見る余裕がなく、リリは天然なところはあるものの、ボケの概念がない。入鹿部長は論外だ。

なにより副会長は必ず勝つために全力で挑んでくるので、笑いを取りにくいこともない。

「それでは第一問！ まずは国語の問題です」

舞台の上で、空気がピンと張り詰める。

「本日は副会長とお姉さんがいらつしやるので、苗字の『漁火』^{いさりび}から出題を。漁火とは漁船が魚をおびきよせるための焚き火ですが、これで釣れるものをお答えください」

少し曖昧な問題に、競技者達は頭を悩ませる。

リリはしばらく目を閉じた後、カッと見開いて、手早くフリップに答えを書いていった。

「ヒント。『漁火』は季語ではありませんが、類語は夏の季語になっております」

司会の言葉を頼りに、全員答えを書いていく。

フリップを一齐に出してから、司会は二人ほど書かれた答えを弄った後、答えを発表する。

「正解はイカです！ 漁火に誘導されて釣れる主な魚を書いている人も正解とします」

リリを始めとして、六人中四人が正解した。『するめ』と書いていた入鹿部長も、おまけでOKになった。

「では第二問です。初夏になって夏キャベツも出荷されて、スーパーでの値段も安くなってきました。そこで今年のキャベツの生産量が三位なのは千葉県ですが、一位は何県？」

これは勢綱も中学時代に習った覚えがある。しかし授業で出ていただけで、どこかまでは覚えていない。リリは先ほどと同じように少し瞑想してから、答えをフリップに書きこむ。

「それでは答えをどーぞー！ 愛媛埼玉愛知愛知愛知ぐんま」

「あ、あれ？」

司会の読み上げた答えに、リリが他の回答者のフリップを見ようと、慌てて身を乗り出す。

「正解は愛知県でしたー。群馬県は去年ですねー。毎年この二県が首位争いしてるんですよ」

どうやらリリは古い記憶で覚えていたようだ。ネットワークを駆使してすぐデータから情報を引き出せるので、こうした問題で年度をミスするのは、逆に頼りすぎと言えた。

この後は数学、英語、化学、世界史の問題と続く。授業で習うものを軸に出題されていて、成績の高い人ほど正解率も高い。ここはリリも全問正解で、残りの問題に移る。

「架橋リリさんと同姓同名のキャラが出てくるA Iアプリも世にはありますが、さて、海外のA Iアプリで一番流行っているものはなんでしょう？」

この雑学問題には、競技者も観客もみんな首を捻っている。ただ一人、日笠聖石を除いて。

「んー、難しいように思えますが、ほとんどの人が知ってるものです。巷にあるA Iアプリとは少し違うのが、ヒントです」

「あ、わかった！」

今の司会のヒントで何かが繋がったのか、リリが嬉々として手元のフリップに書きこむ。副会長はリリを横目で見ながら歯軋りをして、頭を悩ませていた。

時間制限いっぱいになって、全員がフリップを出す。

「この中に正解者が二人いらつしやいます。それでは正解を発表します……『L I L Y』（リライ）、日笠さんと架橋さんが正解です！」

「ひじりんやったね！」

喜ぶリリが、隣の席の日笠に向かって両手を挙げる。日笠は客席の視線を気にしながらも、恥ずかしそうに両手でハイタッチした。

「リリさんと同じ名前のこの音声A I、みんなが持つてるスマホのOSに初めから搭載されますねー。なので普及率は圧倒的なのです。あ、別にこれは引っかけ問題じゃないですよー」
勢綱はPC研に入部した日に、日笠に『架橋リリ』の名前の由来を尋ねたことを思い出す。人を繋ぐ意味の架け橋と、リリは女性っぽい名前を適当に、と教えられた。

「L I L Y……」

その単語が頭に引かかった勢綱は小声で呟くと、手持ちのスマホを起動させた。

L I L Yは昔から使われていた自然言語処理ソフトウェアが、時代とともにA Iアプリに進化したものだ。しかしダウンロードストアに並んでいるようなA Iアプリとは異なる。

一番大きく違う部分は、音声認識に完全特化していて、キャラクターが存在していない。進化したナビゲーションソフトウェアという認識が一般的だ。

そのために最初からOSに搭載されているアプリケーションとはいえ、利用者も少ない。勢綱はL I L Yの詳細をその場で検索してみる。すると開発者の一人の中に、ステイブンという、気になる名前を見つけた。しかし特に、その人物の詳細は書かれていない。

検索を続けてみたものの、他のサイトでも、それ以上掘り下げられている記事はなかった。諦めて勢綱が舞台に視線を戻すと、知力勝負はずいぶん進んでいた。

「最後の問題はなぞなぞです！ えー、こほん。時間をかけて手でしこしこすると力強くなつていって、汁をぶっかけて喉越しを楽しむものといえは？」

司会が出した問題に、男子生徒からは笑いが、女子生徒からは悲鳴とブーイングが上がる。解答席の女子達のリアクションを楽しむ、サービス問題だ。

三咲先輩は、隣の席の箱根紅と顔を見合わせて恥ずかしそうに、副会長は赤くなった顔をフリップで隠しながら答えを書きこんでいる。入鹿部長は笑顔で楽しそうに、日笠は無表情を貫いて、リリは首を少し傾げた後、これだと手早くペンを走らせた。

「それでは正解を順番にどうぞ！ うどんうどんうどんうどんう、っ……!!？」
掲げられるフリップを順にリズムよく読んでいく司会の声が、最後で止まった。

観客の女子から悲鳴に似た声が、男子生徒達は身を乗り出して、驚嘆の声を上げている。場の反応に疑問に思った日笠が、隣でリリが掲げたフリップを覗きこむ。
するとみるみるうちに、頭の頂点までゆでダコみたいに真っ赤になっていった。

「な、な、な……なに連想してるのよりリっ!!」

とっさにリリの手からフリップを奪い取ると、すかさず膝で叩き割る。

「ちがうの？」

「違わっ……とっ、とにかく！ この問題はパスして何も書かずに座ってなさい！」

「えーっ」

日笠に本気で怒られて、リリは不満そうな声を上げる。しかし日笠が鋭い目で睨み続けているので、肩を縮ませて素直に言うことに従った。

「えっと、こほん。気を取り直して、では正解に移りまーす」

解説の女子が乾いた笑いを浮かべて、場を進行させる。

「最後の問題の正解は……うどんです！ えーっと、みなさん落ち着いてくださいね」

一応、リリ以外は全員正解だ。変な想像で、今も顔が真っ赤な副会長も正解している。

まさか完璧に打ち返してくる人間がいるとは思っていなかったのか、司会と解説は大汗を掻いている。出題者は後で先生に呼び出しを食らって説教コースなのは、間違いなかった。

リリはなぞなぞや連想ゲームの類が苦手だ。抽象的なものを捉える力が不足していて、期末テストでもそうした問題で毎回詰まっていたと、テスト後に言葉を漏らしていた。

しかしここまで羞恥心が不足しているのは、勢綱も日笠も予想外だった。

A Iアプリで卑猥な単語を禁止ワードにしても、恥ずかしかる反応を見せるとそれを喜ぶ利用者もいる。なのでリリはあえて、何も知らない態度を取ってみせる仕様になっている。

今回の解答はその設定が、完全に裏目に出た形になってしまった。

「人気は出るけど、こりゃ今夜の男子生徒のオカズ確定だなー」

流河にとつてもさすがに予想外だったのか、他人事のように笑い飛ばすしかない。

こればかりはどうやって性教育を身につけさせればいいのか非常に難しい。日笠と話し合いをして——と勢綱は考えたけれど、絶対に協力してくれるはずもないのは明らかだった。

「それでは結果を見てみましょう。トップが架橋リリさんと日笠聖石さんの八点、次点で副会長の六点、その後——」

舞台の上では、先ほどのコーナーでの点数が読み上げられている。

苦手な分野で点を落としたものの、リリが日笠と同率で首位に立った。得意分野で副会長と点差をつけられなかったのは、相手を褒めるしかない。

セットリストはそのままに、次の種目に移る。

「第二回戦は時の運ー！ 体力勝負の前に、純粹に強運を競っていただきます」

競技者の六名は役員に促されるまま、舞台の前に立った。

それぞれへ声援が飛び交う中、勢綱はパンフレットで競技の内容を確認する。

「なになに、じゃんけん、ビンゴ、ババ抜き……盛り上がるのか、これ？」

勢綱の危惧通り、じゃんけん対決は司会一人が張り切って実況していたものの、淡々と流れて五分もかからずに終わった。勝ち抜きと総当り戦の両方でトップだった日笠が、少し浮かれた顔を見せていたのが少ない見所だった。周りに拍手されるのはまんざらでもないらしい。

次のビンゴは、競技者がひらがなの五十音から、五マスの中央を除いた二十四個を選ぶ。客席の生徒を主催がランダムに指差して、その生徒の苗字の頭文字が有効になるルールだ。

「副会長が考えたのかは知らないけど、よくできてるな」

勢綱が説明に感心している通り、これは観客と一体になって大いに盛り上がった。結果、箱根紅と三咲先輩がワンツーを飾って、リリと副会長は同率最下位だ。

リリの場合には二十四文字を選ぶ時点で、数が少なそうな子音を多く狙ったのが裏目に出た。副会長は単純に配列が悪すぎた。あまり運の強くないタイプなのかもしれない。

最後のババ抜きは三回行って、順位ごとにポイントがつく。円卓を囲んだ競技者が手札を取るその後ろを、カメラが順に回る。観客側に設置されたモニターに、その映像が流れていた。終盤には手札を選ぶ際に、客席から悲鳴や声援が飛び交うので、これもかなり盛り上がる。

「ふにゃあああああ〜」

特にリリは物凄く表情や態度に出るので、受けがよかった。

初回も二度目も最下位で、ふにゃふにゃと円卓のテーブルに崩れ落ちた。

「リリちゃん、ポーカーフェイス、ポーカーフェイス！」

途中、見かねた客席の流河がアドバイスを送るものの、無表情を装っても目線や体の動きで簡単に見破られてしまっていた。結局、最後の三回目も最下位に終わった。

「前に一度絢星と俺と三人でやった時も、弱すぎたからなあ……」

リリがやさしすぎるのか、反省と経験がまったく活かされなかった。

結果、ババ抜きの首位は副会長で、鼻高々に豊かな胸を反らしている。

「性格が悪いヤツが強いつてよく言うもんな、これって」

流河の呟きに勢綱が苦笑していると、壇上から地獄耳の副会長に睨まれてしまった。

二つの種目が終わったところで、競技者六名はグラウンドの方へ向かう。

「次は体力勝負ー！ モニターでも中継しますが、近くで応援したい方は移動して下さい」

司会の説明を受けて、客席の生徒達もぞろぞろと場所を替える。応援するなら近くの方が楽しいので、勢綱と流河も後に続いて席を離れた。

「百メートル走、跳び箱、ハンドボール投げか……地味だ」

「暑いから水泳とか観たいけど、手間と時間がかかるだけだしなー」

正午が近づいてきて、直射日光も少しずつつきつくなる。勢綱は手にしたうちわを。パタ。パタと仰いで、少しでも日焼けを防ぐようにタオルを首に巻きなおした。

まずは百メートル走から始まる。一から六レーンのスタートラインに立つ女子六名が、陸上中継のように一人一人改めて紹介されると、トラック横の観客から、歓声と拍手が起こった。

解説女子の本命は陸上部の三咲先輩、対抗には四月の体力テストで学年上位だった副会長、ダークホースで運動部の助っ人によく駆り出されている、入鹿部長の名前を挙げていた。

「リリちゃん、がんばれー」

流河が声援を送ると、二人に気づいたリリが笑顔で手を振る。

「フライングは一回まで、二度目は誰がフライングしても失格です。それでは位置について」

スターターがピストルを上げると、周囲は一斉に静まる。

「よいー——」

パン！ と弾けた音とともに、六人が綺麗に並んでスタートした。

「リリちゃん早い！」

スタートダッシュで、リリと、陸上部の三咲先輩の二人がトップスピードに乗る。

意外な展開に歓声が沸き起こった。しかし後半に入ったあたりで、リリがスタミナ切れを起こして、その隣のレーンを走る副会長が抜き去って二位に上がる。

そのまま前に行く三咲先輩に並びかけにいつて、誰もがこの二人の勝負になると確信した。勢綱と流河の二人を除いて。

「いつ、漁火入鹿部長だーっ！」

残り二十メートルの地点で、大外から大きな影が前を行く二人を抜き去ると、そのまま一気に後続を突き放してゴールテープを切った。

「まさに大外直線一気！ 後半の物凄い加速でぶちぎりましたー！」

観客全員、信じられないものを見たと言わんばかりに、大歓声が沸き起こる。

自然とイルカコールが起こる中、入鹿部長は涼しげな顔で両手を振って観客に応えていた。

「なあ勢綱、部長本気で走ってなかったよなあ……？」

「あの人なら楽に初速でぶちぎれるからなあ……」

部員二人は乾いた笑いしか出てこない。突き放された陸上部の三咲先輩はショックよりも入鹿部長の走りに感激して、その場で夏の大会に出ないかスカウトを始めるほどだった。

「リリも頑張ったけど、元々スタミナないしペース配分の意識がなかったな」

すでに疲労困憊なリリの背中を、日笠がやさしくさすっているのが見えた。

「次の種目は跳び箱でーす！ まずは五段から、それを越えられればそれぞれ申告制で争って頂きます。チャンスは二回まででーす」

トラック横に用意された跳び箱に女子六名が移動して、軽い練習を行う。日笠とリリは踏み切り板で、念入りに跳躍のタイミングを確かめている。

まずはくじ順で箱根紅から始まって、副会長、三咲先輩、入鹿部長と難なく最初の五段をクリアしていく。次は日笠の番だ。

しかし、なかなか助走を始めようとしなない。

「ひじりん、がんばー☆ どんどんどーんといこう！」

リリの声に後押しされて、意を決した日笠が助走から、バン！ と踏み切り台を蹴った。と思ったら、そのままの勢いで水平に飛んで、跳び箱に体ごと直撃した。

「ひっ、ひじりっ、だいじょーぶ!？」

慌ててリリと役員達が駆け寄る。みぞおちを打ったのか日笠はしばらくうずくまっていた。様子を見に来た入鹿部長にお姫さまだっこをされて、テントの救護室まで連れていかれる。

拍手と同情の声、そして百合百合しい声が観客から上がっていた。

「……俺達も日笠さんの様子、見にいかなくていいの？」

「だってリリちゃんまだ跳んでねーし。行っても笑いのみに来たの？ って言われるだけさ」

勢綱は容易に日笠の怒る顔が想像できたので、見舞いは競技後に行うことにした。

「えー、日笠選手は跳び箱棄権で、次のハンドボールも一人だけ休憩中に行います」

司会からの淡々としたアナウンスが入る。リリのことを見守る名目で参加したのに、自分が心配される側になってしまった日笠に、勢綱は心から同情した。

「てーいっ！」

しかしリリも踏み切りまではよかったものの、二度とも跳び箱の上に座る形になってしまつて、五段をクリアできなかった。体育の授業で、まだ跳び箱の経験がなかったようだ。

そのまま女子四名で競技が続けられて、箱根紅が六段、副部長が十段、三咲部長が貫禄の十二段でフィニッシュした。残る入鹿部長はと言つと。

「二〇段を楽々跳んだあーっ!!」

この学校の跳び箱の最上段を楽にクリアしてしまったので、そこで競技は終了となった。

残るはハンドボールだ。二種目終わった時点で、もはや誰の目にも入鹿部長のトップは確定していた。次も一体どれだけ凄いものを見せてくれるかに、観客の注目は移っている。

「リリってハンドボール投げとかやったことあるっけ」

「アプリの方にもそんな項目はねーぞ。日笠も遠投のモーションなんて入れてないっしょ」

流河は手にしたビンのラムネをぐいと飲みこんで、炭酸で少しむせる。直前練習で入鹿部長に投げ方を教わっているリリを見て、勢綱は期待半分不安半分で応援することにした。

くじ順はリリが最初だ。二番目を引いた入鹿部長は、最後を引いた箱根紅にくじを取り替えてもらっていた。この方が盛り上がるからと気を利かせてくれた形だ。

「では架橋選手、よろしく願いますー」

アナウンスを背に、リリは白線の引かれたサークルの中に入る。

真剣な面持ちで助走を始めると、ライン手前で大きく振りかぶって体にしなりを入れる。

入鹿部長の教えが利いているのか、物凄くモーションが様になっている。客席からおおおと歓声が上がった。

「ていっ！」

しかし投げたボールは放物線すら描かずに、数メートル先にポトリと落ちた。

「さすがにたった三分の練習じゃどうにもならなかったか」

まいった顔で流河は天を仰ぐ。いくら飲みこみが早くても、ボールを投げるには力の流れを理解してコツを掴まないことにはどうにもならない。人間になって一月のリリには早すぎた。

それでもリリは笑顔で観客に手を振って、後ろに下がる。

箱根紅の後に、三咲先輩が好成績を出して場を盛り上げたところで、副部長の出番だ。

「ソフトボール経験のある私の遠投を、目に焼き付けるがいい！」

恰好よく台詞を放つと、助走から大きなモーションでボールを投げる。

言葉通りの綺麗な放物線を描いて、三咲先輩のラインよりも遙か先に落ちた。

優雅に肩にかかった髪を払って、副部長は声援に応える。

「いくらなんでも、姉さんが私を越えられるわけがない」

次の順番を待つ入鹿部長とすれ違う際、得意げに言い放つ。入鹿部長は全く意に介さず、手元のソフトボールをお手玉してサークル内に入った。

「最後は漁火先輩です！ どれだけの遠投を見せてくれるのでしょうか、期待しましょう！」

司会が煽り気味にアナウンスすると、観客席から手拍子が起こる。

ここにいる全員の視線を一身に集めた入鹿部長は、一つ深呼吸をしてから助走に入った。

ライン手前で大きく踏みこむと、地面の土が勢いよく抉られる。

「どおりやあーっ！」

力強いかけ声とともに放たれたボールは、凄い勢いで山なりに飛んでいく。

そのままグラウンドの対角線上に並ぶ木々を越えて、校舎を囲む高い網柵の上に直撃した。

「……すつ、凄すぎるっ……!! 記録は、測定不能でーす!!」

観客席から驚きの声と大喝采が沸き起こる。完全にお祭状態だ。

あまりに凄すぎて、妹の副部長は口を開けたまま、放心している。

「なんだあれ、男子でもあそこまで飛ばねーぞ!? 何者なんだ、うちの部長……」

勢綱も流河と同じ気持ちだった。一体どうしてうちの部活にいるのか不思議でならない。

驚きの表情の部員二人をよそに、入鹿部長はリリに抱きつかれて、満足気に微笑んでいた。

※

前半戦が終わって、十分間の休憩に入る。

観客の生徒にはスポーツドリンクとあんぱんが、生徒会役員達から配られていた。

勢綱と流河は客席から離れて、設置されたテントの影で休んでいる女子三人と合流する。

「ふにゆく。結構たいへんだよ」

「よく頑張ってるわよ。今のところ、あまりみんな差はないのね」

「次も、がんばる」

「日笠さん大丈夫？ 思いっきりみぞおち打ちつけてたけど」

「佳月くんは私を笑い者にするために来たのかしら」

「なー、言ったろ？」

勢綱の肩に笑って腕を置く流河を見て、椅子に座る日笠が目を細める。流河は自分も文句を言われる前に、素早く話題を変えた。

「日笠、知力対決でリリちゃんと同率首位なんだな。もしかして頭いい？」

「リリを作ったのは私よ。見くびってもらっては困るわ」

「体力勝負は圧倒的最下位だったけどね……リリに負けるとは……」

「わ、私も普段から運動してればリリと同じくらいにはなるから」

「ふふ、ひじりんもちゃんと運動しなきゃダメだよー？」

得意げにリリは日笠の周りを回っている。入鹿部長がこの一月、体力向上のトレーニングにつき合っていた成果が出たようだ。日笠は恨めしそうに、唇を嚙んで小さくうなづいていた。

「じゃあ、みんなまた後で」

「リリちゃん、女子力対決期待してるぜー」

「リリ、自信があります！ まーかせてー☆」

客席に戻る二人をリリはVサインで見送る。痛みから回復した日笠は役員に連れられて、一人残っていたソフトボールの遠投に向かっていた。

短い休憩が終わると、舞台前の客席に生徒達が戻ってくる。

「それでは後半戦、女子力対決第一弾、料理対決をはじめます！」

「手前の棚に用意された食材の中から好きなものを選んでもらって、二品目調理してください。」

制限時間は二十分。審査員はバスケット部長、茶道部部长、生徒指導の先生の三名です」

「主食と副菜、それぞれ別々に順位をつけさせていただきます。それではスタート！」

司会と解説による競技説明がなされて、開始と同時に女子六人が急いで食材を手にする。

早いもの勝ちでそれぞれが選ぶ中、目当ての食材がなく、悲鳴に似た声もちらほら上がる。

「副部长はなすと鶏肉でドライカレーを作りはじめましたねー」

「カレー粉は食材にあるんですが、制限時間内にカレーを作るにはこれしかありません。見事なチョイスです！」

絶賛する解説に、鼻高々の副会長。包丁さばきも手馴れたものだ。

一方のリリは拙い手つきで、卵と白い粉を入れたボウルをかき混ぜている。

「なあ、リリちゃんって料理できたっけ？」

「流河が知らないのか……自分で料理しないと、アプリでも使わない項目だしなあ」

リリに精通しているはずの流河なのに、珍しいこともあるものだと言いつつ勢は肩をすくめた。

「レシピはデータにあるはず。前に一度絢星と一緒にホットケーキ作りうとしたこともあったから、三次元のフライパンの使い方もわかってるし。簡単なものくらいはできる……多分」

目当ての食材を取れたので、調理経験のあるホットケーキを作っているようだ。

入鹿部長は麻婆豆腐、日笠はしょうが焼き。副菜はそれぞれ味噌汁やサラダを作っている。

「全員無事、制限時間内に主食は作り終われそうです。副菜で苦戦してる人もいますね」

「一体どんな味がするのでしょうか、非常に楽しみです。解説の私は食べられません」

実況の合いの手をバツクに、あつという間に二十分が過ぎて時間切れになる。副部长は食材

が足らずにお目当ての副菜を作れなかったのか、少し悔しそうだ。

「それでは仕上がった料理を、順にご紹介してゆきましょう！」

箱根紅はツナサンドとみたらし団子、三咲先輩はナポリタンと豆乳スープだ。

副部長はなすと鶏肉のドライカレーと、アボガドとトマトサラダの本格的な料理だった。色彩の美しさに客席から驚嘆の声が漏れる。

入鹿部長は麻婆豆腐と、ほうれんそうとなめこの味噌汁。意外と家庭的だ。

「部長って料理できたんだな！」

流河と一緒に、勢綱も驚いた様子を見せている。

「架橋選手はホットケーキと、スクランブルエッグですね。両方に卵を使った、こちらも見事なチョイスですね！」

解説の女子に褒められて、リリは両手を腰に当ててドヤ顔を浮かべている。

「そして最後は日笠さん……ですが……」

「しよが焼きと、ピザトーストです……」

困惑する司会に、日笠は俯いたまま答えた。

タレを間違えたのか、血のように真っ赤なしよが焼き。真っ黒焦げに近い、乱雑にチーズとソーセージをざく切りにして、上に乗せただけのトースト。しかもナポリタンで三咲部長にピーマンを先に取られているので、おくらとしよゆも混ぜて焼いていた。

「ま、まあ、和風ピザトーストということで、これはこれでアリなんじゃないでしょうか」

慰めるような解説のフオローに、日笠はますます落ちこんでいた。

「では審査員のみなさんに試食して頂きましょう！」

役員達の手によって審査員の三名に料理が運ばれて、順に味の感想を行っていく。なぜか日笠の料理が一番手になっていったものの、あえて誰も追及はしない。

激辛しよが焼きと焦げたトーストを口にして盛大にむせる三人に、客席から笑いの渦が巻き起こる。日笠は今すぐにでも部屋に籠っていたい気分だった。

副会長と入鹿部長は、どちらも主食の評価が高い。副会長のアボガドとトマトサラダは、時間になかったのもあって、シンプルすぎると辛口な評価も上げている審査員もいた。

「最後は架橋選手の料理ですー。綺麗に焼きあがったホットケーキですねー」

審査員の前に自分の料理が置かれて、どきどきしているリリ。

司会の合図とともに、三人が一斉に口にする。幸せそうな表情で咀嚼していたと思っただつかの間、三人とも苦い顔に変貌して、手元の水を口に流しこんだ。

「にっ、苦い！ 物凄くしょっぱい！」

疑問に思った日笠が審査員の一人に駆け寄って、料理を一口分けてもらう。すると審査員達と同じ表情を浮かべた。念のため、スクランブルエッグの方も少し頂戴する。

「……これ、砂糖と重曹の量を間違えてるわね」

「そんなー！ 確かこれが砂糖で……ウエエッ」

リリが自分の席に置いてある容器を手にして、中に入った白い粉を指で舐め取ると、涙目で身悶えた。客席がどっと笑う。

「ベタすぎるドジっ子！ だがそれがいい！」

司会の男子が心から叫ぶ。男心をくすぐる萌え要素に、流河は腕を組んで頷いていた。

料理対決が終わると、舞台上のテーブルが全て片付けられる。最初の知力対決と同じセットリストに戻ると、女子六名はそれぞれ自分の席に座った。

「次は女子力対決第二弾！ こちらのお題の解答をお手元のフリップに書いて出してもらい、手元のスマホで投票してもらいます。今持っていない方は観ているだけで構いませんのでー」
フリーの投票サイトを利用して、順位で点数をつけるしくみだ。

このコーナーのみ司会が生徒会の書記女子が変わって、解説との女性コンビになっている。他の競技でどれだけ点数を稼いでいても、肝心の女子力が低いと、今後の周囲からの目線も変わってしまう。全員真剣な面持ちで、解答に臨んでいた。

「行きます、第一問！ 自分があまり話したことのない、クラスメイトの苦手な男子から告白されました。その時あなたはどうしますか？」

キュッキュと音を立てて、女子六名がフリップにサインペンで答えを書きこんでいく。
「それではこちらから順番に行きましょう！ なるほど、『やんわりと断る』『メール交換だけする』『はっきりと断る』『一緒にお昼寝』『相手のことを徹底的に調べる』『デートする』」

それぞれ舞台右手から三咲先輩、箱根紅、副会長、入鹿部長、日笠、リリの順だ。性格が答えによく現れている。

「では投票をお願いします！」

客席の生徒達は投票サイトから入力していく。

答えについて司会が解答者達に質問している間に集計が終わって、結果が発表された。

「一位は、架橋リリさんです！ おおっ、みなさんどよめいてますねー」

「女子からすれば断るパターンが多いですが、これには男子の投票も入っていますので、男子にやさしい女子が支持されるのは当然のことといえますね」

適切な解説の説明に、大いに頷く客席の男子生徒達。女子生徒からはブーイングが上がって、険悪な雰囲気だ。女子力とは、かくも難しい。

AIアプリは、人に尽くすことを最重要の行動原理としてインプットされている。
なのでリリが包容力では六人の中だと一番なのは、当然のことと言えた。

「では第二問です。無二の親友と思っている女の子から、ある男の子が好きだと告白されました。しかし自分も同じ男の子が昔から好きです。あなたはこれからどうしますか？」

「よくある漫画やアニメの、恋愛ものみたいなシチュエーションですね」

解説の補足が入る。六人は悩んだり即決したり、様々な表情を見せながら記入していく。

順にフリップをオープンしていくと、副会長の番で、司会の女子が小さく悲鳴を上げた。「なにか文句でもあるのか？」

フリップには『殺してでも奪い取る』と書かれてあった。観客がみんな青ざめている。「副会長もかなりピーキーな性格してんなー」

流河が腹を抱えて笑っていると、舞台の上から副会長に睨まれて、椅子からずり落ちた。そんな恐ろしい答えで、会場がますます不穏な空気に包まれたまま、第三間に入る。

「彼と一緒に映画を観に行くことになりました。なんでもいいと彼氏は言っているのですが、あなたが決めることになります。そんなあなたが彼氏と一緒に観たい映画のジャンルはどれ？」

この設問には三咲先輩と箱根紅、そしてリリも恋愛映画と答えていた。王道とも無難ともいえる。リリの場合はA Iアプリの初期設定で、恋愛映画好きという性格付けがされている。

この三人とは対極的に、副会長はホラー映画、入鹿部長は怪獣映画、日笠はサイエンス映画と完全に趣味全開で書いていた。

「日笠さんは本当に、リリを造った人間なんだろうか……」
自分の理想の姿なのかなと、勢綱は乾いた笑いを浮かべていた。

「では最後のお題です。自分の彼氏はとても人当たりがよく、他の女の子に人気があります。しかしここ最近、特に話す回数が増えたように感じます。その際にあなたはどうしますか？」

「これ、流河のことじゃないのか」
「なんでだよ！ オレ、周りからこんなふうに見られてたの!？」

勢綱の呟きに、流河が思わず立ち上がる。しかし周りの生徒全員に、無言で頷かれていた。しおしおと背中を丸めて着席する流河の背中を、勢綱が優しくポンポンと叩いてやる。

この質問も副会長とリリは対照的な答えで、『彼氏に断罪、断罪、また断罪!』と、『こっちを見てくれるようにわたしも頑張る』となっていた。投票の結果は言うまでもない。

「観てるコッチが疲れるコーナーだったわ……」
「まったくだ」

全問が終わると、この競技ではリリがトップに立っていた。男女から見ても好かれる解
答だったのは、アプリの利用者達が、リリに理想の女性像を重ねているからかもしれない。

そうした応対のデータの蓄積が、今のリリを形作っている、ということだ。
「最後に残るは衣装コンテスト。これから参加者の方々が着替えに向かいますので、ここで一旦小休止を挟みまーす」

イベントは盛況で、時間を押している。正午も回ってずいぶん陽射しが強くなっていて。客席に影になる部分がないので、生徒達は校舎や木陰に避難して、各自休憩を取っている。

「あっちなー。もっと遅い時間に始めればよかったのに」
「午後からはいろんな部活がグラウンド使うし。そこで生徒会も、小道具片付けてるし」
衣装コンテストの着替えは舞台裏のテントで行われているので、勢綱達は蚊帳の外だ。

しばらくすると司会の案内が流れて、休憩していた生徒達も観客席に戻ってきた。

「みなさんお待たせしました。今回のイベント最大の目玉、衣装コンテストを始めたいと思いまーす！ みんなー、燃えているかー！」

待ちに待ったとばかりにテンションが上がっている司会のレスポンスに、男子生徒を中心に大きなコールが起こる。客席は昼の部活動で登校した生徒も増えていて、立ち見も出ていた。

「それでは参りましょう、エントリーナンバー一番！」

司会が力強く叫ぶと、舞台の袖から城崎三咲が陸上の大会用ユニフォームを着て登場する。空気を抵抗を考えて肌を露出している部分が多く、引き締まった腹筋のラインが丸見えだ。そして普段の体操着で日焼けした部分との、白い肌とのコントラストが更に映える。

扇情的で健康的な肉体美に、熱狂する男子生徒が何人も、客席から舞台前に押し寄せる。慌てた生徒会運営の注意が、拡声器から飛んでいた。

対照的に流河は、勢綱の隣でクールな表情だ。

「本当に二次元にしか興味ないんだな、お前……」

「でもこのシチュエーションはご褒美だぜ、リリちゃんもやってくれないかなあ……」

脳内でリリの日焼けユニフォーム姿を妄想している流河を、勢綱は冷たい目で見ていた。

次に箱根紅が舞台袖から、ステップを踏んで現れた。これに流河は体を起こして反応する。

「これはギャルゲっほい！ 白で統一された清楚さを前面に押し出した夏のファッション。そして男心をくすぐる麦藁帽。見事だ……」

中身よりも格好に萌えている時点で、やはりこの男、なにかが違う。

白ワンピースの箱根紅が舞台を左右に練り歩いて、さながら撮影会のようになっている。

くるりとその場で回ってみせると、生足の太股に男子生徒達が一斉に、興奮の声を上げた。

「イベント終了後には自主希望で撮影会を行う予定もございませうので、下がってくださいーい」運営からの注意が再び飛んでいて、もはや完全にアイドルイベントと化していた。

場が落ち着くのを待ってから、司会は次の番号に移る。

「ではエントリーナンバー三番、漁火紗世梨副会長です、どうぞー！」

紹介に合わせて副会長が姿を現すと、観客から大きなどよめきが沸き起こった。

「ふっ、副会長っ?!」

あまりの不意打ちに司会が興奮している。副会長は下乳が見えるほど生地面積が少ない黒のビキニと、ハイヒール姿で登場した。下もローライズで、下腹部がむき出しだ。

「ちよっ、ちよっこれは大丈夫なんでしょうか？」

慌てて司会が運営に確認を取る。OKが通ったものの、客席のざわめきは収まらなかった。

舞台前にはすっかり男子生徒の列ができていて、みんな写真を撮り続けている。副会長はポーズを取らないものの、壇上をモデル歩きしているだけで観客を惹きつけていた。

「スタイル良すぎだろ、さよりん。あれで彼氏いないとか信じられねーわ」

流河はその光景を見て、感心したように笑っている。あそこまで副会長が勝負にこだわる理由はなんだろうと勢綱が考えていると、次の競技者が呼ばれた。

「エントリーナンバー四番は日笠聖石さん……ふおっ!？」

不意打ちに司会の声が裏返る。客席からも、先ほどの副会長より大きな歓声が上がった。勢綱は思わず椅子から立ち上がって、壇上の日笠に目が釘付けになる。

体のラインが出た学校指定のスクール水着に、普段から部室で羽織っている白衣、そして足にはビーチサンダル。この滑稽なアンバランスさが、日笠の魅力を全面に引き出していた。

「だからわっ、私はこんな格好しかなかったの……!」

耳まで真っ赤にして、白衣の襟を両手で引っ張っている。運営に注意されて、渋々着ている水着を見せるも、その場から一步も動けずに、男子生徒達に写真を撮られ続けていた。

「誰のチョイスなんだ、あれ」

「さあ、オレも日笠にはなんにも関わってないからな……部長かりりちゃんじゃ」

戸惑う勢綱の問いかけに、流河は笑って答える。

「とりあえず、面白いからオレも近くで写真撮ってくるしー」

浮かれ気分です席を離れて、舞台に近づいて写真を撮り始めた。

「こらっ、砥水くんっ! あとで殴るわよっ!」

勢綱は日笠に元データを消される前に、流河に画像を転送してもらおうと、心に決めた。すっかり会場は熱気に包まれていて、司会もハイテンションだ。

「ハイレベルな戦いが続いています、最終戦の衣装コンテスト! 続きましてはエントリーナンバー五番、漁火入鹿先輩の登場だー!」

そして入鹿先輩が姿を現すと、その熱気が一瞬にして収まる。全員、声を失っていた。

一八〇を越える身長に、体のラインがくつきりと浮かび上がったチャイナドレス。

豊かな胸とスリットから覗くしなやかな脚線美。高級そうな扇を手にして、側頭部はお団子で髪をまとめている。高校生とは思えないほどの見た目で、全身からオーラを放っている。

「こいつぁおどろいた……!」

「さすが入鹿部長……妹さん以上のスタイルだ」

部活でいつも顔を合わせている流河も勢綱も、我が部長のポテンシャルに畏怖していた。

入鹿部長は舞台中央に立つと、くるりと横に一回転して猫のポーズを取ってみせる。そこで堰を切ったように、静かだった客席から熱狂的な歓声が上がった。

「にゃ〜ん♪」

ポーズを決めるたびに猫の鳴き声を上げる入鹿部長。多くの女子生徒も写真を撮ってしまうほど、入鹿部長の中華猫娘の反響は凄まじかった。

ここまで五人の衣装審査が終了して、残すはリリ一人になる。

生徒会運営は場を落ち着かせるために、リリの登場に少し間を置いていた。

「どれも甲乙つけがたいハイレベルなんだけど、本当にリリは勝てるのかな、流河？」
不安になった勢綱が尋ねると、自信満々の笑みを返される。

「まあ見てなって。とっておきの秘策もあるし」

「秘策？ それってどういう……」

訊き終わる前に、スピーカーからドラムロールのSEが鳴り響く。

「では最後に登場していただきましょう、エントリーナンバー六番、架橋リリさんです！」
気合いの入った司会の紹介の後、ぴよこっと舞台袖から、マイクを持ったリリが飛び出してくる。その格好に男子生徒を中心に、大きな歓声が沸き起こった。

「ひゃー！ これはA Iアプリの架橋リリが、ダンスモードで着ている、アイドル衣装とまったく同じ格好だー！」

まるでスマホの中から、そのまま飛び出してきたようにしか見えない。

そのアイドル姿に、戸惑いと驚きと喜びの入り混じった歓声が、客席で飛び交っていた。

リリが舞台の中央に背筋を伸ばして立つと、舞台袖のスピーカーから曲のイントロが流れ始める。かつて動画サイトでポーカーロイドソフトを使って作曲されて、八桁の再生数を誇っていた楽曲だ。ネットの一時代を席卷した代表曲として、今でも長く親しまれている。

A Iアプリの架橋リリには、音楽に合わせてリリを躍らせるモードがある。日笠が稼働当初からおまけとして入れていたものだ。ネット上で無償配布されている、3Dモデルを踊らせるモーションを流用して、同じく無償で利用できる楽曲を、数曲分導入していた。

これが大受けして、今では用意された振り付けを入力することで、様々な曲を踊らせることができる。もちろん楽曲の著作権の問題はあるものの、動画サイトやSNSでは今も愛好者が作成した動画が連日アップされている。

そのモードが話題となったきっかけの動画と同じ楽曲を、生身のリリが同じ衣装を着て、同じ振り付けで熱唱する。どう見ても立体映像としか思えない、歌うリリのその姿に、まるで魔法にでもかけられたように、客席は興奮のるつぼと化していた。

「みんなありがとー☆ 架橋リリでしたー！」

たった二分のショートバージョンでも、客席は全員立ち上がって拍手喝采だ。

もはや完全にアイドルのコンサートと化していて、他の競技者達も声を失っていた。

「……あんなパフォーマンスありなのか？」

「ルールには書いてねーけど、運営の音響担当に直談判したら一発OKだったぜ☆」

してやったりな表情で、流河がサムズアップする。誰かが今のステージを動画サイトにアップしたら大変なことになるだろうなと、勢綱はただ笑うしかなかった。

「これにて全種目終了いたしました！ 最後に全員に再び集まってもらいましょうー」

三時間以上に及ぶイベントも、ようやく終わりを迎える。衣装コンテストのままの姿で競技者の女子六人が壇上に並んで、それぞれ司会から感想の一声を求められる。

その合間に点数の集計も無事完了して、いよいよ結果発表の時間だ。会場内に緊張が走る。

「それでは発表いたします、第一回ミス垣根澤コンテスト、栄えある優勝者は——！」

※

「お疲れ様」

備え付けのテントで休んでいるPC研の部員達のところへ、生徒会長が声をかけた。

「生徒会長。来てたんですか……って当たり前か」

ずっと姿は見えなかったのは、裏方の作業に回っていたからだそうだ。副会長が参加しているのもあって、生徒会長まで顔を出したらイベントが堅苦しくなるという配慮からだった。

「今回は副会長の急な申し出でみんなに迷惑をかけた。すまなかったね」

「いやいやー、超楽しかったですマジで。な、日笠？」

満面の笑顔で流河が日笠に話を振ると、むすっとした顔で視線をそらした。恥ずかしい目ばかり遭って、いい思い出が一つもなかったのだろう。すでに夏服に着替えている。

「もうこういうイベントには二度と出ないわ。たとえリリのお守りでも」

「えー、ひじりんも一緒に出ようよー。今度はステージでデュエットしたいな☆」

「お願いだから本当に勘弁して、リリ……」

これだけへこむ日笠もなかなか見ない。日笠の袖を引っ張るリリも、すでに夏服に着替えさせられている。本人が撮影会をするつもりでいたところを、日笠に無理矢理拒否された。

「しかし君達二人は本当によく似ているね。昔のことを思い出すよ」

その光景を見ていた生徒会長が、どこか懐かしそうに微笑む。リリが首を傾げている横で、日笠が背筋を曲げたまま視線だけ、生徒会長の方へ向けていた。

「彼女は元気かい？」

「——ええ。元気にやっているわ」

「そうか、それはよかった。架橋さんも今日はありがとう」

生徒会長は日笠となにやら話し終えた後、隣にいるリリに握手を求める。リリは笑顔でその手を取ると、大きく腕を上下に振っていた。

「ここにいたのですか、生徒会長」

お目当ての人物を見つけた副会長が、遠くから駆け寄ってくる。生徒会長はPC研の部員達に軽く一礼した後、その場を離れた。

「まだその格好でいるのかい。早く着替えたまえよ、先生達に見つかるらと怒られる」

「何を仰ります、生徒会長に見て欲しくて私はこのような格好をしているのですから」

「あんまり張り切りすぎると逆に引かれっぞー、さよりん」

「そこ黙れっ！ あとさよりんって呼ぶなど言っているだろう！」

はやしたてる流河に、鬼気迫る表情で副会長が怒鳴る。生徒会長の方へ振り返るとすぐに満面の笑顔になっているのだから、女性は恐ろしい。

と、そこで即席の撮影会から戻ってきた、姉の入鹿部長が向かいからやって来る。

副会長は敵しい顔で姉の前へ立ちはだかると、ふっ、と悔しそうに笑ってみせた。

「お姉さま、優勝おめでとう。やっぱり私はお姉さまには敵わないみたいだ」

心からそう思っているのだろう、諦めも入った憂いのある表情。そんな妹の頭をぼんぼんと入鹿部長はやさしく手のひらで叩いてやると、微笑んでみせる。

「今日みんな楽しんだのは、さよりのおかげ。このイベントの勝者はさより」

「つ……。まったく、昔からお姉さまは人をその気にさせるのが上手い……」

完敗だ、と妹は自嘲気味に笑ってみせると、頭の上に置かれた手を払いのける。

そして近くの椅子でくたびれているリリのそばまで行くと、鋭い目で見下ろした。

「架橋リリ。今回は貴様と同点だったが、次回の文化祭では私が勝つ！」

「まだやる気なんだ……」

再戦を誓う副部長に、勢綱達は乾いた笑いを浮かべるしかなかった。

副会長は最後の衣装コンテストでさすがにやりすぎたのか、競技終了後に先生方のクレームで覆って、あの水着が生徒会運営からアウトの判定を食らったのだった。その分の点数が入らずに、最終的に衣装コンテストで首位になったリリに、追いつかれてしまった形になった。

「結局、なんでそこまで副部長がリリにこだわるのか、よくわからなかったな」

テントから離れる生徒会長の背中を、駆け足で追う副会長。その姿を遠目で眺めながら、勢

綱は頭を搔いてみせる。

「私には、なんとなくわかるけれど」

「恋する女心、つてやつなのかもねえ」

珍しく日笠と流河が意見を合わせている。入鹿部長もふんふん、と頷いていた。

「副会長、好きな人がいるの？ じゃあ応援しないと！」

「リリちゃんが手伝うとややこしくなるんで、生温かい目で見守ろうぜ」

「えー、どーゆーことー？ 教えてよー」

駄々をこねるリリの姿に、勢綱を除いた三人はくすくすと笑っている。

ほんの少し疎外感を感じていた勢綱も、リリと一緒にいいか、と心の中で呟いた。

※

初夏も終わって、緑の匂いを含んだ爽やかな風が窓の外から教室に入ってくる。いよいよ夏本番と言った感じだ。

週が明けると期末テストの結果が返ってくる。この学校はテストの成績は張り出されることはないのです、好成绩な生徒は伝聞でしか伝わらない。

逆に赤点は補習を免れないので、容易に知れ渡る。幸い勢綱は全教科で赤点を回避できた。

「くわく数学赤点だったわ……科学と合わせて二つ目……」

「本当に数字に弱いな流河。ギャルゲーのパラメーター管理は完璧なのに」

「元氣出そう！ 補習終われば夏休みだよ！」

四限目の授業が終わって、自分の机に突っ伏している流河を、リリが明るく慰める。

「早く食堂行かないとパンが買えないぞ、流河」

「わーってるって。でもさすがに堪える……リリちゃんは満点なんだよな」

「わたしは数字が一番得意かもー。記述問題がないのはなんでもいけるよ！」

リリは胸を張って答える。クラス一ではないものの、十分上位の成績だ。特に数学は公式を一度頭に入れておけば、計算を全く間違わない。さすがA Iアプリ上がりともいえる。

「あの……架橋さん？」

勢綱とリリが流河の席を囲んで話しているところに、ふと声をかけられた。

振り向くとクラスメイトの女子三人がいる。流河とも、普段あまり接点のないグループだ。

「わたし？ なになに？」

「よければ一緒にこれから、学食でご飯食べないかなって……」

声をかけた三つ編みの女子が、恥ずかしそうにリリを誘う。

「先週のミスコンのこととか、もっと他にもいろいろお話したいなって」

後ろの女子二人もうんうんと頷いている。リリはぼかんとした様子で、勢綱に顔を向けた。

転校してきた初日から、ずっと勢綱が昼休みもリリを連れ回していたせいで、今までこんな機会がなかった。部活最優先なので、HRや休み時間ぐらいいしかクラスメイトと会話しない。

なにしろリリにも初めてのことなので、どうすればいいのか自分で決められないようだ。

声をかけてきた彼女達も、これまでずっと機会をうかがっていたのだろう。過保護にするあまり、リリがクラスに溶けこむきっかけを避けていたのかもしれないと、勢綱は思い直す。

転校してきて一月以上経つことから、そろそろ独り立ちできるようにさせる機会も増やしておきたい。乳離れする子を見守る気持ちとはこのことなのかと、少し感慨深くなった。

「いいんじゃない？ 日笠と入鹿部長には伝えておくよ」

「あ、じゃあオレも！ っついてて、勢綱なにすんだ」

「お前はこつち。リリ、昼休みが終わるまでみんなと楽しんできて」

勢綱はOKすると、輪に加わろうとする流河をヘッドロックしたまま教室を出ていく。

「うん、わかった、ひじりん達によろしくね！」

不安を笑顔で振り払うと、リリは勢綱達に大きく手を振った。二人の姿が見えなくなっ

たら、リリは少し緊張した面持ちで、クラスメイトの女子達と意思疎通を始める。

それが談笑に変わるまで、さして時間はかからなかった。